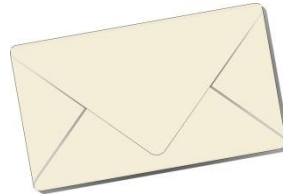


書簡型連載 1 出会いとご縁



竹中 尚文 様

お坊さんとケアマネさん



差出人 木村 晃子

はじめに

本連載は、平成27年12月発行の対人援助学マガジン、大谷編集員の編集後記を読んだ私（木村）が、リレー連載という言葉から、書簡型連載ができないものか？と考え、大谷編集員に相談したのが始まりでした。手紙を差し出す相手は、同じくマガジンで連載をされている竹中尚文さんでした。北海道と兵庫県という全く異なる地で人生を歩んでいる私と竹中さんは、これまで接点などはありませんでした。あるとすれば、団編集長を共通に知っている、ということ位でした。では、何故？

お坊さんとケアマネさん！訪問仕事は、似ている？！

私の仕事は、高齢者支援の分野、介護保険制度におけるケアマネジャーです。業務の主体は相談援助です。介護が必要になった人の暮らしを支えるために、相談に応じたり、手立てを考えたり、地域の関係機関や住民の方々とのネットワークを構築するなどしながら、援助対象者を支える「チーム」を作っていきます。ケアマネジャー（以下ケアマネ）は、そのような援助のために、最低、月に一度は援助対象者の自宅に訪問し面談、状況を把握していく、という業務上のルールがあります。毎月毎月、高齢者の方に、変化があってもなくても訪問をします。支援期間が長くなると、かなりその家庭の事情に詳しくなっていきます。訪問日を調整するにあたっては、「その日はお坊さんが来るからダメ。〇時以降にして。」などと言われることもあります。ですから、訪問先のご家族の月命日を確認し、お坊さんの訪問と重ならないように調整することもあります。月に1回お坊さんが来る。月に1回ケアマネが来る。私たちケアマネは訪問すると、高齢者の方から、「そろそろお迎えにきてもらいたいんだけど・・・」など、命の終わりに関する話題が出されることが珍しくありません。「死」とう話題を避けることが出来ない仕事でもあります。なんだか、お

坊さんとケアマネの仕事は、似ているかもしれない？と感ずます。

エピソード 仏壇を破壊する！

ある時、様々な事情から、自宅にある仏壇を処分しなければならないという人の話を聞いたことがあります。事情を伺うと、その人が仏壇を所有していることの意義を感じられないのも仕方ないことかもしれない、と共感してしまいました。どのように処分したらよいか、が相談のテーマになりました。よく聞く「お焚き上げ」などという方法も、ある程度経済的な負担が伴います。経済状況が厳しいご家庭でしたので、その方法は採用されませんでした。では、仏壇を壊して、自治体の指定のゴミ分別に従って、ゴミ袋に入れて処分しよう、という話になりました。「たたりなど、悪いことは起きないでしょうか？」と心配の言葉もありました。キリスト教を信仰している私は、「たたり」などは全く考えることはありませんでした。結局、仏壇を壊すと言っても、それなりの力が必要で、様々な道具を使って、仏壇を壊して処分したのです。このエピソードについて、「もしも、お坊さんなら、何というのだろうか？やはり罰当たりなのだろうか。」と考えたこともありました。そして、いつか同じマガジンを連載している竹中さんとお話する機会があったら面白いだろうと考えた最初でした。もう2、3年前の出来事です。

出会い

書簡型連載をしてみたい、ということをお大谷編集員に相談したところ、私の思いは編集部にお伝えされました。編集部の許可が出た後に、お大谷編集員が、竹中さんへ私の希望をお伝えしてくれました。竹中さんから書簡型連載について、お受けしていただける旨のお返事がきました。いつからスタートするにしても、一度会ってから・・・ということになり、この件に関して、竹中さんが兵庫県から北海道に足を運んでくださることになりました。6月中旬、初夏の北海道でお迎えし、一日中、様々なお話をしました。連載に向けた一歩が具体的に変わった善き日でした。

往復書簡 1 「生と死」 見えぬものを見る・伝える

竹中 尚文さま

拝啓

八月に入り、ようやく遅すぎる夏がやってきた感じがした初旬でしたが、お盆を迎え、窓から侵入してくる風は、肌にささるようになりました。もう秋を感じてしまいます。短い北海道の夏です。

竹中さんと北海道でお会いしてから、もう二ヶ月になろうとしています。代わり映えのない表現になりますが、月日の経つのは早いものです。

この度の原稿を意識し始めた7月、この書簡型連載のテーマを考えていました。お坊さんとケアマネ仕事の共通点を探して書いてみようと思いました。すると、真っ先に浮かんだテーマが、「死」でした。私の仕事は、高齢者支援の現場ですから、どうしても人の「死」と向き合うことが多くなります。支援の終結は、入院や「死」ということが多いのです。入院の先には当然「死」が待っていたりするのです。支援対象者の年齢を考えると、それは珍しいことではありません。けれども、最近では、「死」を語る時の文脈が変化してきます。人は、どこで死ぬのか？ということを考えなくてはならない時代になりました。

かつては、人が老い、人生の最期の時を迎える場所は、自宅、そして家族の中で、ということだったと思います。私が子どもの頃は、自宅で人が亡くなる（看取る）というのは、珍しくなっていた時期でした。大抵、一度は病院に入院して、そこで最期を迎えるという形が主流になっていました。今でも、高齢者を在宅介護している子世代の方々は、「何かあれば病院のお世話に・・・」ということをお話されます。けれども、私たち専門職からは、「もう病院で死ぬ時代ではない。」ということをお話さなくてはならないのです。忌み嫌われる話題です。けれども、ケアマネは「死」の話をしてではなく、人として避けて通ることのできない「死」について、どのように向き合い生きていくのか、という、「生きる」ことを話題としているのです。

私のような若輩者が、人生の先輩方に対して、「生きる」を問うなど、100年早いことを仕事にしています。でも、100年たったら、私自身が生きていくかわからないので、若輩ながらも、この「生と死」の話題を扱いながら日々仕事をしているのです。

人体（生物学的な命として）の衰えを自覚してきた時に、どのような最期を迎えたいかは、本人だけではなく、関わる周辺の人たちの意向が強く影響します。例え本人が、「何も治療は望まない。」と言ったとしても、周りの家族がそれに同意するとは限らないのです。大抵は、「死」の話題は避けているものですから、「さて、どうしよう。」という段階で本人が意思表示できることは少ないのです。

最近では、終末期の自分の希望を事前に記しておくことで、望まない治療をさけること、人としての尊厳ある最期を迎えられるための準備をしておくことなど勧められています。とは言っても、なかなか浸透しているものではありません。人が、自分の「死」を、或いは家族の「死」を考え準備していくためには、自分とつながりのある様々な「縁」を知っ

ておくことが必要かもしれないと感じます。

お坊さんのお仕事は、亡くなった誰かをご縁としながら、家庭に関わることが多いのではないのでしょうか。今を生きているその家族に、どのように、「生や死」を伝えているのですか？または、どのように、「生や死」の話題を取り扱うのでしょうか。

詩人谷川俊太郎さんの著書「ひとりぐらし」の中で、谷川さんは、「死生観」よりも、「死生術」もしくは「死生技」を持ちたい、と記されていました。どう死んでいくかの技術のことだそうです。当然ですが、人は死ぬ瞬間まで生きる。生きている間は、様々なしながらみの中にいるということ。そう考えると、やはり、自分だけの意思で死ぬるわけではないことを想像します。そもそも、生きていること自体が、様々な関係性の中で成り立っている訳ですし、「生きている。」などと能動的な表現よりも、「生かされている。」と言った方が現実的なのかもしれません。

とりとめなくなってしまうました。話題は「死」でした。始まりの話題が「死」だなんて、この手紙をのぞき見している読者の方は、どのようにお感じになるのでしょうかね。

いつの間にか、外は台風接近の影響で、大雨になっています。あまり経験のない大雨。生かされていることを感じながら・・・

敬具

木村 晃子

木村晃子さま

竹中尚文

拝復

北海道では、秋の風が吹き始めようとしているのですか。連続台風の被害も心配です。関西では、まだまだ暑い、というより熱い日々が続きます。私が暮らすところは田園地帯です。まだ黄色くなれない薄緑色の稲の田圃、深い緑色の山、青い空、白い雲、私は夏のこの景色が好きです。

今回のテーマは「死」ですか。いきなり50回忌の法事の話ですが、クリスチャンの木村さんには年忌の法事と言っても、遠い話だろうと思います。仏教徒の方でも「50回忌の法事なんて、そんな昔の事は知らない」と言われることもあります。50回忌というと49年前です。49年前、私は11歳でした。50回忌の法事を勤めながら、ご当人を覚えていることも多いです。当時、亡くなる方の中心世代が60代だったように思います。少年だった私には、60代は末期が間近の世代に見えました。当時は、脳溢血や中風で寝たきりの老人達があちらこちらの家で見られたように思います。私は、今年60歳になりました。まだ死ぬ準備ができていません。

「もう病院で死ねる時代ではない」という言葉にはハッとしました。かつて病院で末期を迎える時代に入った頃、「自宅で死にたい」という人達がずいぶんといたように思います。今、自宅で家族に看取られて臨終をむかえると、直ぐにはお葬式と言うことになりません。死亡診断書が出ないのです。死亡診断書がなければ、葬儀屋さんも坊さんも遺体に触れることはできません。死亡診断書を書けるのはお医者さんです。家族に看取られて安らかに息を引き取った場合、検死官による検視を待たねばなりません。その間、看取った家族は聴取を受けることになるのが通常です。

お葬式といっても最近はずいぶんいろいろな形があるようです。宗教家の介在しないことも増えてきました。しかし、葬儀屋さんが介在しないことはありません。50年ほど前は、私が育ったところでは、村人が薪を準備し、棺をその上に置き、火葬したものでした。そこには一寸した技もあったのですが、伝承されていません。湯灌もできなくなりました。近年、経済的事情で葬儀費用をかけられないケースで、私が湯灌をしたこともあります。私たち夫婦がよくお世話になった老僧のお葬式では、私の妻が湯灌をしていました。お世話になった感謝の気持ちです。湯灌はさておき、まれに「アレっ？」と思うことがあります。家族が遺体に触れられないことがあります。生きている時は手を握ったりしていたのに、死んでしまうと触れるのを避ける人たちがいることがあります。「死」が明確に分かつのです。まさしくDEADLINEです。

お葬式とその後の七日参りに関わると、この家族は故人をこんなふうに使っていたのかと感ずることがあります。また、故人はこんな人だったのかと感ずたり、今はきつとこんなふうに使っているのかなあと想像したりします。つまり、故人と遺族の関係を想像でき

ます。故人は臨終の時にこの人たちのことを思っただろう、と想像します。臨終に至ってまだ自分のことしか考えなかったかもしれない人もいます。そんな場合は、お葬式も七日参りも単なる儀式になってしまいます。

私は「生と死」の関係をこのようにとらえています。生者と生者の関係性が「死」によって断たれるのではないと思います。私が教えたり説明をしたりすることはありません。死者を中心に生者が繋がっていると思える場に、私が居あわせるのです。そして、私が教わったのです。確かに人間は死ぬまで生きるのですが、生きることは死によって終わるのでしょうか。私たちが生きるのは他者との関係性によって生かされていると思います。独力で生きることなど至難の業です。他者によって支えられて生きています。その関係性は死によって断たれる訳ではないと思います。死者に支えられた人生をいくつも見せて頂きました。私はそこにいるだけの坊さんです。

今月はお盆の月でした。忙しいお盆でした。昨年のお盆参りの途中、生まれて初めて稲の開花を見ました。感動的でした。ひとりで見入ってしまいました。写真を撮ることもなく、しばらく静かに見ていました。そして、また次の家に走りました。待たれているところに訪ねて行くのはありがたいことです。

合掌